

水田転換畑における飼料作物の作付体系試験

泉 省 吾・池 田 定 男
(長崎県総合農林試験場)

IZUMI, S. and IKEDA, S.
Cropping Systems with Forage Crops on the Temporarily Dry Field

諫早干拓の水田転換畑で、昭和45年より4年間、良質で年間生草収量が多く、栽培時期や飼料給与の时期的調節、放牧或いは機械化などを考慮し、水田転換畑向きの飼料作物の作付体系について検討した。

1. 試験の方法

作付体系として単年生の輪作体系5体系、多年生の体系7体系について、1区56~111m²の2区制で実施した。各体系名は第1表のとおりである。また、各飼料作物の耕種法は標準耕種法によった。

2. 試験結果および考察

干拓重粘土壌での飼料作物の周年栽培における収量性について調査した結果は第1表のとおりである。現在、年間2t/a程度の生草収量を上げ得る体系として夏作ソルゴーまたはローズと冬作イタリアンとの輪作体系が有望視されるが、ソルゴーの嗜好性、ローズの発芽稍難、湿害、雑草害などの問題点が残されている。また、体系3, 4では青刈コーンが干湿害や倒伏などで低収であった。しかし、コーンは青刈、サイレージ用として飼料価値が高く、また、飼料かぶは多収で冬季の生草として貴重なので、コーンや飼料かぶを組入れた別の体系について検討の余地があろう。また、ダリス、バヒアは単独でも年次が進むとかなり多収(第1表)であるが、イタリアンの追播などにより年間の収量増、利用期間の拡大などについて検討の余地があると考えられる。輪作体系の栽培期間については一般に梅雨期の湿害や播種・収穫作業難、現在の市販品種などを考えると、夏作ソルゴー、ローズは5月中下旬~10月中下旬、冬作イタリアン(早生種)は10月中下旬~5月中下旬頃が一つの目標の期間と考えられよう。しかし、今後、乾田化などによる多湿条件の軽減化、イタリアン極早生多収品種の育成、ローズの発芽率向上や、不耕起播などが安定技術として確立可能であれば、一層省力、合理的な作付体系の確立も期待されよう。

第1表 作付体系別年間生草収量

作付体系および供試作物	生草収量 (kg/a)		試験年次	
	最低~最高	平均		
1 ローズグラス ⊕イタリアン	682~1,028	859	45 }	
	990~1,084	1,026		
	年間合計	1,685~2,112	1,885	48
2 ソルゴー ⊕イタリアン	937~1,203	1,028	45 }	
	1,001~1,097	1,040		
	年間合計	1,958~2,092	2,010	48
3 青刈コーン ⊕エンバク	362~437	400	45 }	
	709~719	714		
	年間合計	1,071~1,156	1,114	46
4 青刈コーン ⊕飼料かぶ ⊕青刈コーン ⊕エンバク	217~597	384	45 }	
	1,016~1,172	1,094		
	800	800	48	
	年間合計	1,168~1,389		1,309
5 ローズグラス ⊕エンバク	1,003~1,035	1,019	47 }	
	667~719	693		
	年間合計	1,702~1,722	1,712	48
6	ルーサン	63~555	330	45~47
7	バヒアグラス	286~1,168	823	45~48
8	ダリスグラス	684~1,493	1,194	45~48
9	*ラブグラス	172~336	254	45~46
10	パーミュエダ	232~290	261	45~46
11	トールフェスク	992~1,387	1,190	47~48
12	オーチャード	858~1,096	977	47~48

注) * ウィーピング